

## 球根たち



六十才定年まで仕事に携わっていた関係で僅かではあるが情報産業年金基金の支給を受けている。その組合では秋になると希望者に花の球根を送ってくれる。機関誌に挟まれている葉書を送ると小型の段ボール箱が届いて中にはチューリップやムスカリ、ヒヤシンスそれに大玉の水仙などの球根が入っている。毎年チューリップなどは花壇に植えるが、水仙だけは前々からの原生のものの中に植えている。この新入りの水仙は、横着にも先住の花が終わる頃やつと芽を出すのである。三種類のものがあつて、どれも大輪でしっかりと花を枝の頃に咲かせる。色も濃く、レモン色一色や白に中心がオレンジ色のもなどあつて、ダッファデルズという語が何となく頭に浮かぶ。グレートプリテンの威厳とでも言えそ

うな雰囲気があるのだ。

チューリップやヒヤシンスも様々な種類の混合が送られて来る。チューリップは二十玉程、ヒヤシンスは十玉ほどあるので、もう五年目ともなれば結構な花壇になつていてもよさそうなのに、毎年庭いじりをして花壇の位置を変えてしまつたので、前年のものは全然期待出来ない。花が終われば掘り起こして秋に植えなおすものだが、不精な私は全て植えずばなし。掘り返して出て来てもまたその辺に埋めてしまつたので、チューリップやヒヤシンスなど見る影もなく小さくなり、いつか消えてしまつている。水仙だけは花壇でないおかげで、立派な花を咲かせているものの、それも三年以上は続かないようだ。野性の水仙がいつの間にか増えて、あちこちから顔を出すのとは対照的である。

ヒヤシンスやチューリップと同じ運命をたどっているものに、ムスカリがある。最初はムスカリという名前はなじみがなく、どんな花なのかと紫の花が群れ咲いている袋の写真を眺めたものだった。

届いた球根は、全て十一月の初旬にせつせと埋める。一番先に芽を出すのがムスカリである。細いミリスのような葉が中心から外に向かって広がって伸びて来る。それを見た時何となくギリシヤ神話のペルセウスに首を落とされるメデューサの頭のようにだと思った。その髪は一本一本が蛇で、見るものを石に変えたという。ムスカリの葉のくねりはそれを連想させたのだった。

ヒヤシンスは勇敢にも霜のまだある早春にゆつくりと花開きながら育つ。続いてムスカリが青紫の可憐な花を咲かせる。それは一本の茎に小さな花が細長い毎のように寄り集まって咲く。婀娜つぼさの全くない清々しい花である。私はその花にすらりとした健康的な美少女を連想するのである。そして今や私の一番のお気に入りになった。

昨年の秋は、菜園だった所に水仙以外を並べて植えた。春になって雑草の一群が菜園を覆い尽くした。柔らかな若草の中にヒヤシンスもムスカリも埋没して、チラチラと姿を見せるばかりだった。そして今

は雑草の群れが一斉に花をつけている。薄い赤紫の小さなラツパのような花や、小さな星のようなブルーの小花など、群生して咲くとどれも可愛いものである。

ふと気がつくと、その雑草の間から大輪の赤いちューリップが背伸びして首だけ出して花開いていた。ヒヤシンスは終わり雑草の影に消えたが、ムスカリはまだチラホラ咲き続けている。どうやら今年の菜園は花に占領されたまま終わるのかも知れない。

